

私たちはいつ私
たち自身の魂を
形成する権利を
彼らの手にゆだ
ねたのか・・・

姉妹よ、
まずかく疑う
ことを習え。

「男が決める女の問題」
『新日本』1918年11月号



山川菊栄 (1890-1980)

日本では日常茶飯事となっている婦人同乗客に対する「悪戯」や、婦人通行者に対する侮辱的嘲弄的な言辞は、いわゆる「暴行」と共通の性質をもっている。「資本主義の社会と性的犯罪」『女性』1928年2月号

そこでわれわれは、頭脳労働と筋肉労働とを問わず、すべての職業を通じて男女の賃銀に差等を附せられていることが、どれほど有害な結果を生んでいるかを知る以上、当面の問題としては、極力これに反対し、あくまで差別撤廃のために戦わねばならぬことはもちろんである。「職業婦人問題の諸相」『婦人公論』1925年3月号

山川菊栄記念会
since 1981

<https://yamakawakikue.org>

神奈川県藤沢市片瀬360-10 B-307

cellphone:090-2165-4038

tel&fax: 0466-26-6135

y.kikue@shonanfujisawa.com

郵便振替 00260-6-58492

山川菊栄 (1890-1980) - フェミニズムの源流 -

1890(明治23)年東京の麹町区四番町(現・千代田区九段北)に生まれ、東京府立第二高等女学校を経て女子英学塾(現・津田塾大学)を卒業。『青鞥』誌上で伊藤野枝との「娼婦論争」で論壇にデビューし、26歳で社会主義者の山川均と結婚。大正デモクラシーのなかで謝野晶子や平塚らいてうとの「母性保護論争」のほか、「産児調節論争」や「労働組合婦人部論争」などに社会主義フェミニズムの立場から加わりました。厳しい言論統制の下でも切り口の鋭さ、知識の豊富さ、論理の厳正さは群を抜き、その主張は、リプロダクティブヘルス/ライツ、セクシャルハラスメント、夫婦別姓問題、同一価値労働同一賃金など、現代的課題につながる先見性に満ちています。戦時下では平和主義を堅持しつつ、藤沢に住み「湘南うずら園」を営業。地元の村岡村(当時)地区の人々からの聞き書きを元にした『わが住む村』を著し、亡くなる1980年までこの地に住み続けました。1947(昭和22)年から1951(昭和26)年まで初代・労働省婦人少年局長として、女性や年少労働者の問題解決のため奮闘。その後、1953(昭和28)年に雑誌『婦人のこえ』を創刊し、また1961(昭和36)年婦人問題懇話会を設立して女性解放の活動家や評論家、研究者など多くの後進を育てました。一方、女性たちの日常の営みを母・青山千世の体験とともに著わした『武家の女性』『おんな二代の記』などの平明な作品は、男女を問わず人々を魅力ある歴史の世界にいざなってきました。1975(昭和50)年には、『覚書 幕末の水戸藩』(岩波書店)で第2回大佛次郎(おさらぎじろう)賞を受賞しました。

山川菊栄記念会について

山川菊栄記念会は、1981年に田中寿美子・石井雪枝・菅谷直子・山川振作等によって設立されました。主な事業として、毎年度に実績を示された女性問題に関する地道な研究・調査等のなかから、将来に期待される個人・グループ・団体に対し「山川菊栄記念婦人問題研究奨励金」(通称・山川菊栄賞)を贈呈してきました。左右に掲げた、40件(特別賞を含む)に上る贈呈対象作品や活動は、1981年度から2014年度までの女性学、ジェンダー平等をめぐる30年以上にわたる大きな進展をあらわすものであり、2015年に、第34回をもってこの事業に区切りをつけました。

記念会では山川菊栄の生誕を祝う節目の周年事業として、連続学習会やシンポジウムの開催を続けており、山川菊栄の軌跡を学びなおすとともに現代的意義を再検討しながら、若い世代に伝えることをめざしています。

2011年制作のドキュメンタリー映画DVD「姉妹よ、まずかく疑うことを習えー山川菊栄の思想と行動」(山上千恵子監督作品)やシンポジウムの記録集など各種刊行物のくわしいご案内は、Webサイトから情報提供しています。

神奈川県立図書館蔵・山川菊栄文庫について



山川菊栄賞受賞作品が並び神奈川県立図書館1階「山川菊栄コーナー」

かつて「かながわ女性センター」にあった山川菊栄文庫については、山川菊栄のご遺族から寄贈された蔵書や資料で成り立っていましたが、女性センターの藤沢への機能移転にともない、神奈川県立図書館へ移管されました。2022年9月にオープンした図書館の本館「共生」の棚に「山川菊栄コーナー」が常設されています。2024年現在収蔵庫の工事中につき閲覧停止になっていますが、完成する2026年度以降に閲覧が全面的に再開され、山川菊栄記念会が協力して整理にあたってきた資料も順次公開の予定です。



表側の名言の詳しい解説は「山川菊栄の名言エッセンス」『資料部情報』4号にアクセスしてください。

山川菊栄賞受賞作品・第1回(1981年度)柴田博美・富沢真理子・星野弓子・山田敬子「山川菊栄の研究報告」(『婦人問題懇話会会報』2034、p.52-7)第2回(1982年度)鈴木裕子「山川菊栄集」全十巻(岩波書店)の編集解説第3回(1983年度)福井美津子の翻訳二書ポルテザルマン原著『異文化の女性たち』(新評論)及びジゼル・アリミ原著『女性が自由を選ぶとき』(青山館)第4回(1984年度)亀山美知子「近代日本看護史」(『ユメス出版』)第5回(1985年度)女たちの現在を問う『統後史』(新評論)第6回(1986年度)栗津千ヨ「光に向かっけて咲け」(岩波新書)グレイ・マ・フルーフ・エルダー「政治と台所」(ドメス出版)第7回(1987年度)李順愛・崔映淑・金静伊・李再原著『分断時代の韓国女性運動』(御茶の水書房)の共同翻訳第8回(1988年度)金栄・梁澄子「海を渡った朝鮮人海女」(新書館)有賀夏紀「アメリカ・フェミニズムの社会史」(勤草書房)第9回(1989年度)大林道子「助産婦の戦後」(勤草書房)第10回(1990年度)該当作「該当作なし」第11回(1991年度)浅倉むつ子「男女雇用平等法論」(ドメス出版)第12回(1992年度)働くことと性差別を考えるニ多摩の会「おんな6500人の証言」働く女の胸のうち(学陽書房)第13回(1993年度)大沢真理「企業中心社会を超えて」現代日本を(ジェンダー)で読む(時事通信社)善横京子「婚外子の社会学」(世界思想社)第14回(1994年度)落合恵美子「21世紀家族へ」(有斐閣)第15回(1995年度)ウイメンズセンター「公娼制度・墮胎罪体制から売春防止まで」(岩波書店)第16回(1996年度)藤田ゆき「性的政治学」(公娼制度・墮胎罪体制から売春防止まで)優生保護法体制へ(不二出版)第17回(1997年度)春日キヌコ「介護とジェンダー」男が看とる女が看とる(家族社)第18回(1998年度)春日キヌコ「介護とジェンダー」男が看とる女が看とる(家族社)第19回(1999年度)田村雲供「近代ドイツ女性史」市民社会・女性・ナチソナリズム(阿吽社)第20回(2000年度)柘植あつみ「文化としての生殖技術ー不妊治療に携わる医師の語り」(松籟社)

第21回(2001年度)天野寛子「戦後日本の女性農業者の地位ー男女平等の生活文化の創造へ」(ドメス出版)特別賞「戦争と女性への暴力ー日本ネットワーク(通称VAVV-NET)ジャパン」『日本軍性奴隷制を裁くー2000年「女性国際戦犯法廷」の記録』全五巻(緑風出版)第22回(2002年度)戒能民江「ドメスティックバイオレンス」(不磨書房)第23回(2003年度)三宅義子「女性学の再創造」(ドメス出版)第24回(2004年度)「性暴力の視点から見た日中戦争の歴史的性格」研究会「黄土の村の戦争を終わる」(創土社)第25回(2005年度)森ます美「日本の性差別賃金 同一価値労働同一賃金の可能性」(有斐閣)第26回(2006年度)糠塚康江「パリの理論ー男女共同参画の技法」(信山社)第27回(2007年度)中村桃子「『女ことば』は『くわられ』(ひつじ書房)第28回(2008年度)該当作「該当者なし」第29回(2009年度)堀江節子「人間であって人間でなかったーハンセン病と玉城しげ」(桂書房)西倉実季「顔にあざのある女性たちー問題経緯の語り」の社会学(生活書院)第30回(2010年度)該当作「該当者なし」第31回(2011年度)大橋史恵「現代中国の移住者労働者ー農村・都市関係と再生産労働のジェンダー」ポリティクス(御茶の水書房)第32回(2012年度)徐阿貴「在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な共闘」の形成」(大版の夜間中学を核とした運動)(御茶の水書房)第33回(2013年度)丸山里美「女性ホームレスとして生きるー貧困と排除の社会学」(世界思想社)第34回(2014年度)平井和子「日本占領とジェンダー」米軍・売春者と日本女性たち(有志舎)塚原久美「中絶技術とリプロダクティブ・ライツ」フェミニスト倫理の視点から(勤草書房)